

## II 戦時下の暮らし

戦争の長期化によって、市民生活は国民精神総動員運動のもとに、貯蓄増強・国債消化の協力をはじめ、日常必要な諸物資の供給も難しくなりました。精道村時代の昭和15年7月には、村役場に配給を担当する産業課も新設され、家庭用燃料などの配給は、いわゆる隣組の隣保組織が活用されました。

「村」から一気に「市」となった芦屋市では、市民はその喜びにひたる間もなく、昭和16年から、米、麦、食料品、酒類、卵、パンなどの統制がはじまり、みそ、しょうゆ、塩、ミルク、青果物、鮮魚介、鋳製品なども配給制となり、19年には休閒地の利用もすすめられ、食糧事情は窮迫の状態となりました。



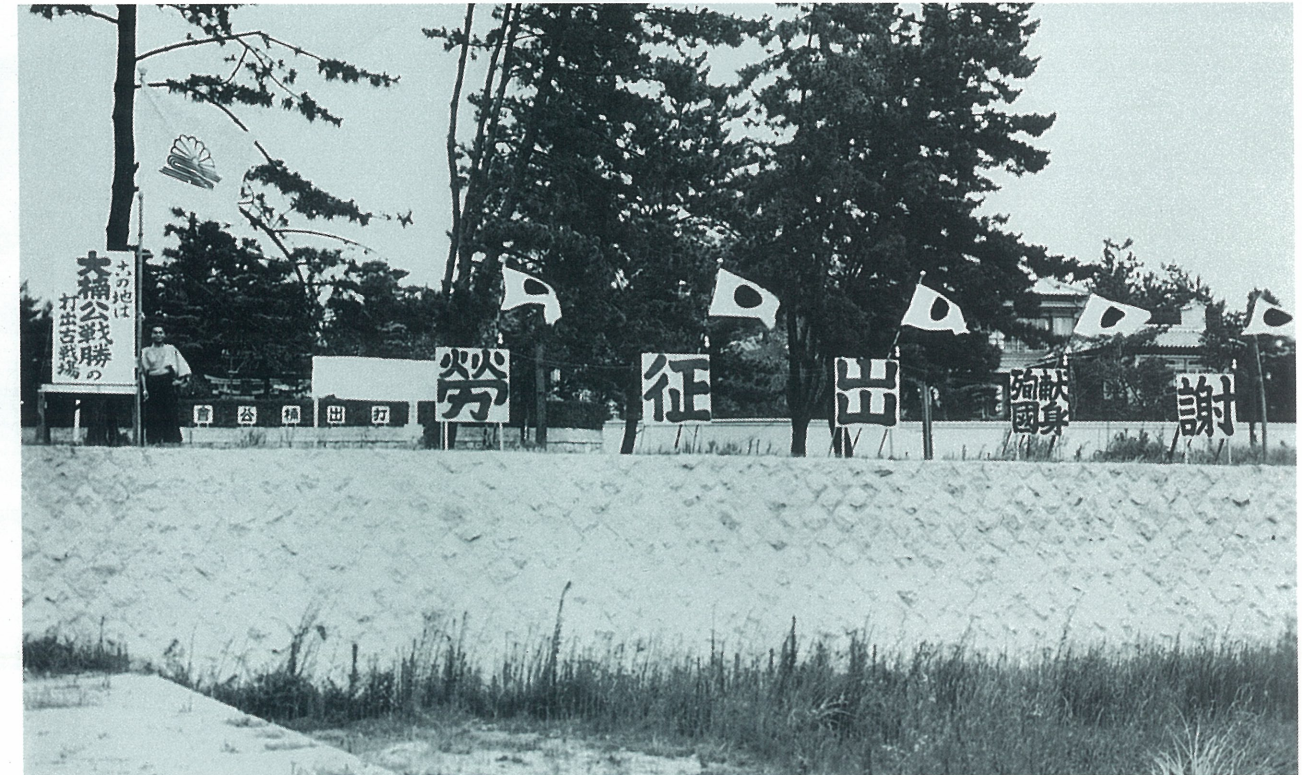
漢口陥落を祝う市民 昭和13年

## 1 戦時下の人びと 出征兵士の見送り

芦屋市が発足して1年、新市として拡充事業もようやく軌道にのってきたとき、わが国は悲慘な太平洋戦争へと突入し、戦時体制のもとに市の自治制も失われていきました。また、市民生活でも召集令状によって動員されていく各家庭の中堅労働人口は増加し、人口比率に占める男子数は減少をたどっていきました。



市役所前で武運長久を祈る人びと



打出出征風景 楠正成の戦跡地にちなんだ打出の戦意高揚の風景



応召兵士の見送り風景 昭和12年ごろ



山芦屋町付近 昭和12年ごろ



## 2 戦時下の教育 学校のように

昭和16年4月に、小学校が「国民学校」と改称されてからは、一層軍国主義教育の風が強くなりました。防空訓練や、勤労奉仕（甘しょづくりなど）の行事も加わりました。



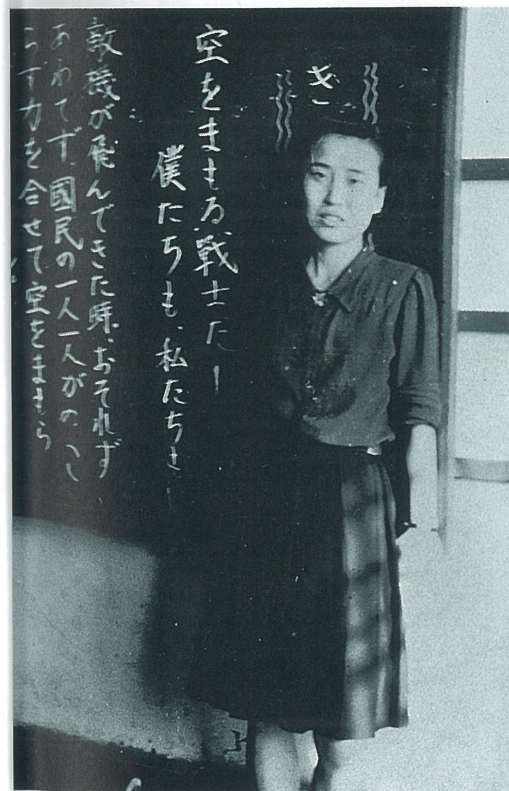
山手小学校校舎の擬装



山手小学校 軍艦の司令塔を形どったといわれる塔屋



戦時下の運動会 山手小学校 このころの学校の運動会は戦時色一色で、当時の世相を物語っている。



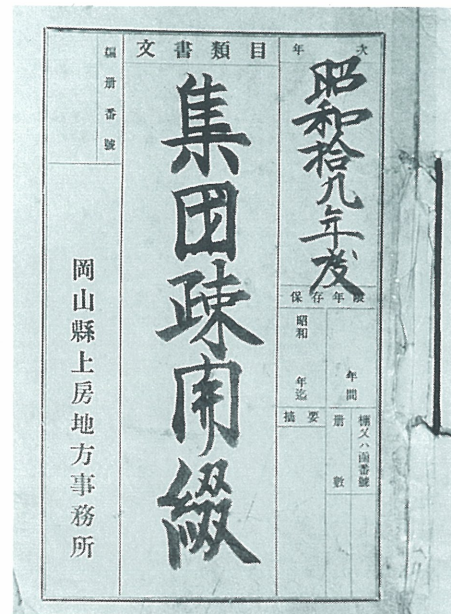
黒板の文字に戦時中の世相がうかがわれる。



青年学校 昭和10年に青年学校令が施行され、同14年には義務制となった。昭和15年の校則によると心身の鍛練、徳性の涵養をうたい、職業および實際生活に必要な知識技能を授けることを目的としている。男子生徒は、行軍や兵営見学、滑空訓練なども実施し、愛国青年・皇国民の練成が行われた。

## 集団疎開

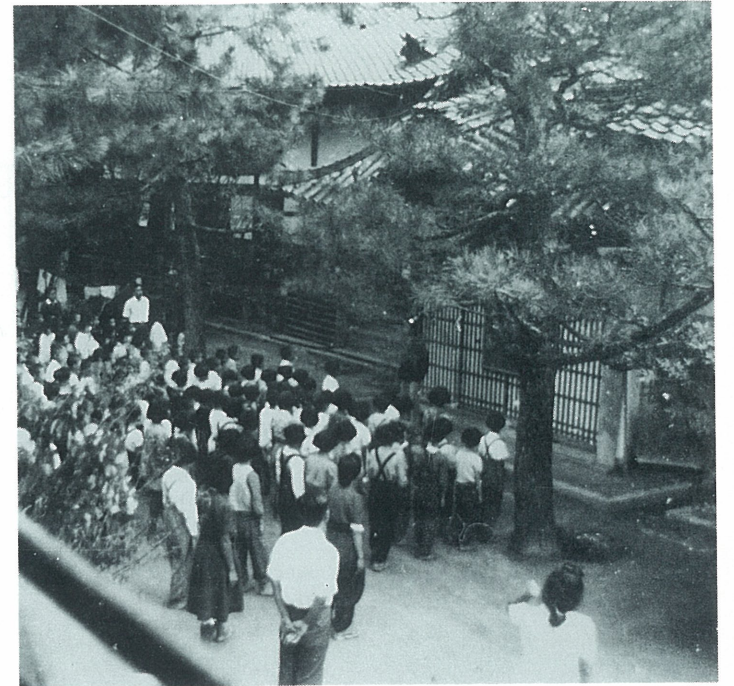
昭和20年4月から空襲が激しくなり、7月になると精道国民学校学童223人、宮川国民学校学童207人は岡山県上房郡に集団疎開を行った。疎開中は、地元の国民学校と連絡を密にして学習にはげむほか、燃料の薪を集めたり、食糧の補いに魚をとり、甘しょ栽培を行ったりした。



**集団疎開綴** 受け入れ先の高梁市に保管されている公文書で、芦屋から疎開した子どもたちに、食糧難のなか、何とか地方のよい生活体験を味わってもらえるようにこの地元の人の苦勞がしのばれる。



精道国民学校の児童 高梁川で、引率の先生たちとのひととき。



終戦 昭和20年8月、疎開先の頼久寺で終戦の放送に聞き入る児童。



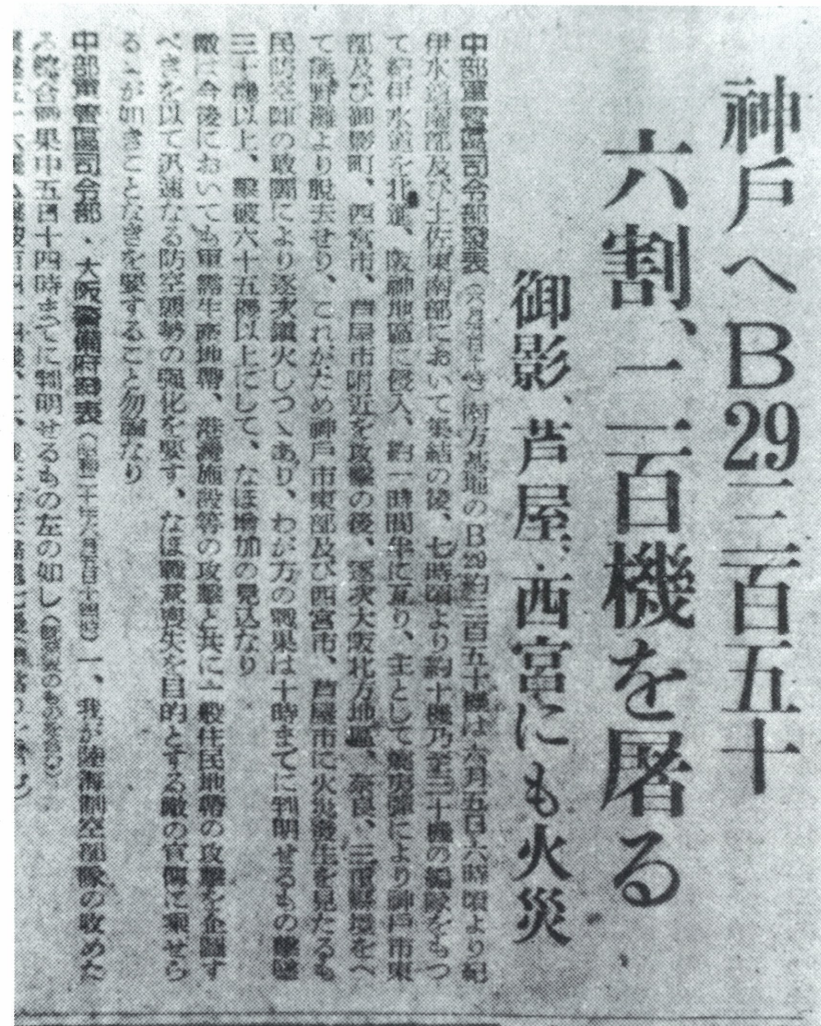
学童疎開 昭和20年7月1日、備中高梁駅に着き移動を待つ児童たち(精道国民学校)。



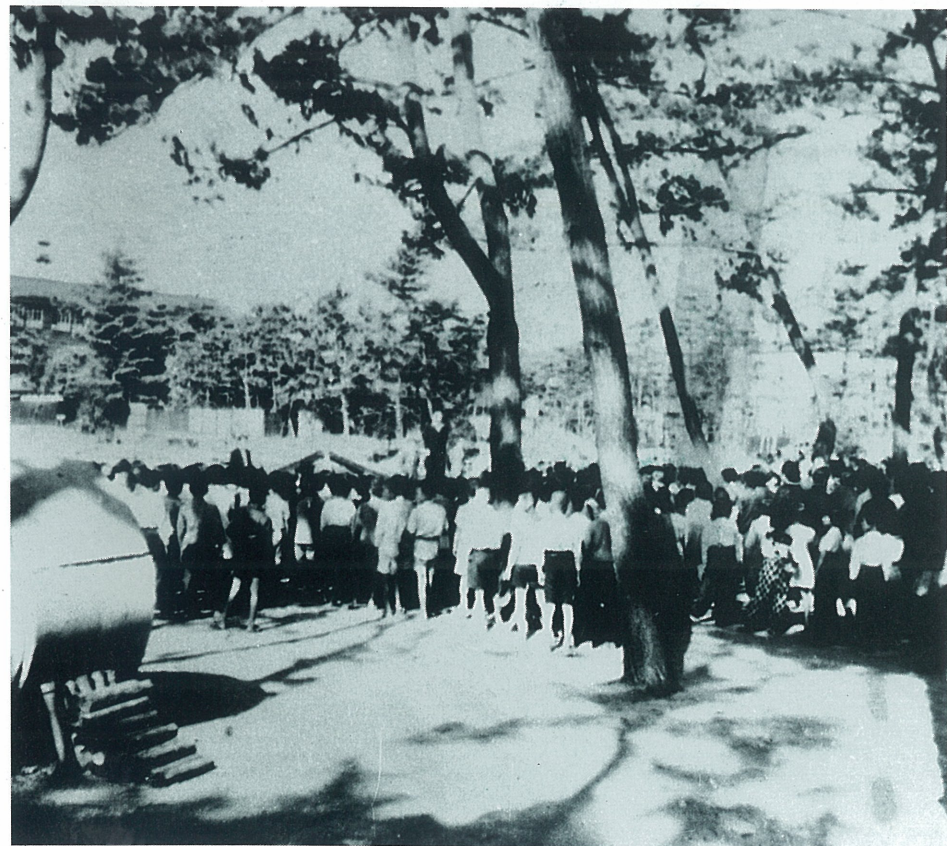
疎開先での精道国民学校児童 疎開先の頼久寺(現・高梁市内)での記念撮影、当時3年生の児童と先生。

### 3 阪神大空襲

昭和19年の東京空襲を皮切りに、本土空襲が頻繁となり、ついに芦屋も20年5月11日第1回の空襲を受け、6月に入って5日、15日、さらに8月5日～6日と相ついで空襲を受けました。とくに1,500発もの焼夷弾が落とされた8月5日夜半から6日未明にかけての被害が最も大きく、芦屋市での罹災者は総人口の5割、家屋は総戸数の約4割、学校は校舎の8割を失いました。



阪神大空襲を報じる昭和20年6月6日付の朝日新聞



疎開先から帰校、焼失した校舎にたたずむ児童 昭和20年10月、疎開先から精道国民学校に帰ってきた児童たちは、焼け落ちた校舎を前に立ちすくんだ。精道国民学校の校舎が焼けた8月6日の夜のように、当時2人の女の先生が宿直しており、「雨のように焼夷弾が落ちて、校舎の中央から窓という窓から赤黒い炎が吹きはじめ…」と恐怖の体験を語っている。

### 4 終戦



空襲後の芦屋市 左の写真は、8月6日未明爆撃時の芦屋・御影の平均弾着点(爆撃の中心点)を示したもの。◎は第314航空団、⊗は第73航空団の平均弾着点。この写真から、芦屋を目標にしていたことが分かる。下の写真は、戦後連合軍が写した芦屋の戦災の状況。戦災で焼失した地域が分かる。